信濃教育

巻頭言

祈り

十五年ほど前の話になるが、私はある保護者の集まりに参加したことがある。子どもの教育に悩みを持つ保護者の集まりである。その会で印象に残り、今でも忘れないある母親の話がある。

男の子を持つ母親である。その子は成人をして今は働きに出ているらしい。学校に行っているときはどうであったのか話をしてくれたと思うが、それはよく覚えていない。社会人となって働きに行っているが、家では何を聞いても全く話をしないようだ。きっと職場で何かうまく行かないことがあるのだろうが、何の話もしてくれない。心配で仕方ないが、どうしようもないのである。

「心配しても何もできません。ですから私にできることは、毎日おいしいお弁当を作って持たせてやることだけです。」

その母親はそう話した。お弁当を作っているときの母親はただただ祈ることしかできなかったのだろう。私はこの母親の言葉に深い感動を覚えたのである。

私の教員生活のほとんどはこの母親と同じであったように思う。家庭の環境でストレスをかかえる子や、努力しているのに結果がでない子など、私の力が及ばないところで悩みを持つ子を目の当たりにして、自分の力のなさに打ちひしがれることの繰り返しであった。「先生には私の気持ちはわからない」と言われたこともあった。では、この母親がおいしいお弁当を作り続けたように、私にできることは何なのだろうか。これは私の教員生活の最大の課題であったように思う。それは教育とは何か、教師とは何か、と言った問題なのだろうが、何もできない自分への問いかけでもあった。

私の行き着いた一つの結論は、子どもたちが学校にいる間は楽しい時間を過ごせるようにする、であった。私は、子どもたちが楽しく満足する授業をする、安心して過ごすことができる学級を作る、そのために私は自分なりに勉強をしたのである。今思い返しても、それが正しかったのかは分らない。しかしそれしかできなかった。

この母親はおいしいお弁当を作れたのだろうか。私は楽しく満足する授業や安心して過ごせる学級を実現できたのだろうか。それで子どもたちが救われたのかはわからないが、そこにはその母親や私の思いがあり、祈りがあったことだけは確かである。

（信濃教育会会長　武田　育夫）